様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３３３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７００８７

研究課題名（和文）中世西日本への白山信仰日吉信仰はじめ諸信仰伝播の研究

研究課題名（英文）The Study of the Spread of Faith in Hie and Hakusan at the Early Midieval Japan (Focus on West japan Area)

研究代表者
平泉　隆房（HIRAIZUMI, Takafusa）

金沢工業大学・基礎教育部・教授

研究者番号：２０１４８３５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　西日本に鎮座する日吉神社・白山神社を網羅的に検出し、それら全てを国土地理院の地勢図・地形図上に確認した。すでに、東日本での作業から把握できたように、延喜式内社を名乗っていながら、中世や近世には白山さんとか日吉さんといわれ、白山信仰や日吉信仰の神社だったところをいくつも検出できた。
　また、山陰・南海・西海道のいづれにおいても、古代山岳信仰の拠点であった場所に、いつの間にか白山信仰や日吉信仰が入り込んでいる事例を探り当て、山岳信仰、延暦寺、日吉信仰が密接に連関していることも改めて立証できた。

研究成果の概要（英文）：In western Japan, faith Hiyoshi and Hakusan faith enter into the base of ancient mountain beliefs There are many cases where it is crowded.
Even though it is Hakusan ceremony company, it is a period of time called "Hakusan san" since the Middle Ages There is a shrine that turns out to be the base of Hakusan faith.

研究分野：思想史

キーワード：白山信仰　日吉信仰　修験道　信仰伝播　中世西日本

１．研究開始当初の背景

申請者（平泉）はこれまで、白山信仰や日吉信仰、つまり山岳信仰や神道思想がどのように庶民の間に広まり浸透していくのかを明らかにすることができれば、この分野の研究に大きく寄与すると考え、白山神社と日吉神社（名称は白山宮や白山比咩神社、また山王神社や日吉社などとも）を日本全国の国土地理院作製地勢図（20 万分の一）また地形図（5 万分の一、2 万 5 千分の一）上に確認する作業をつづけてきた。ことに平成 23 年度から 25 年度の科研費の助力を得て、東日本について作業を進めた。その結果、比叡山延暦寺の荘園（山門領）があった付近には、現在でも日吉神社がまとまって鎮座している場合の少なくないこと、古代中世の主要街道からの至近距離に創建の古い有力な日吉神社が幾社もあって、当該地方の中心的存在となっていたのではないかといったこと、神社のみならず白山堂や日吉堂の名で、単立に、あるいは寺院の中にこれらの信仰を伝える堂のあること、海岸部から川を遡って信仰が伝播したらしく山深い地にも白山信仰や日吉信仰の神社が各地にあること、などを突きとめた。信仰が広まり伝播していくためには、それを伝えた人々や集団、それらの人々の拠点となった社寺があったことが容易に想定され、それについても探りたかったが、限られた時間のなかでは断念せざるを得なかった。なお、東北地方（現在の岩手県など）への信仰伝播経路については、東山道を経てのもの、北陸道経由で出羽国荘内地方から最上川を遡り山越えに入った可能性、東海道から太平洋上を北上しての可能性も残されていること、など種々の場合が考えられ、今度の課題として残った。ともあれ、信仰の分布に関しては、これまでも議論されてきてはいるが、信仰の伝播経路については意外なほど等閑視されてきたように思われる。そこで、申請者（平泉）はこの作業を西国でもこころみ、西日本各地にも分布している白山神社・日吉神社について調査し、信仰がどのように伝播し、どういった場所を拠点としているのかについて検証したいと考えた。

２．研究の目的

（1）白山信仰が代表的な山岳信仰の一つであることに異論はない。現在、約 2000 社の白山神社（白山比咩神社、白山社、白山宮）が全国に鎮座している。その分布状況には傾向があり、日吉神社が多い県には白山神社も多いことが知られている。両者には何らかの関係があるとみてよいであろう。また、白山を望める北陸地方や東海地方に多いのはもちろんのことであるが、意外にも、東北地方にも多く、九州北部にも多く鎮座している。白山神社という神社名では数社鎮座しているだけだが、四国愛媛県には菊理媛・白山大神を祭神とする神社が 100 社を超えて鎮座している。北九州などは、瀬戸内海を経由するのであろうか、それとも山陽道を経由して伝播したのかも興味深い問題である。白山神社が多い県は、日吉神社（山王神社、日吉社）も多いというのは、歴史的には、平安後期から末期にかけての時期に、白山麓にある白山信仰の拠点的社寺の多くが比叡山延暦寺の末寺（別院）になっていることが知られており、安元事件（白山事件）の際に、強訴の目的で上洛しようとした加賀白山佐羅宮の神輿が、日吉社（現、日吉大社）に一時安置されたことなどは『平家物語』にみえ周知のことで、白山神人と日吉神人との協調がそこからはうかがわれるのである。

（2）そこで、このような白山神人と日吉神人の協調が実際どのようなものであったかを探りつつ、両信仰が伝播し広がっていった足跡を検証することにし、すでに北陸道・東山道については調査し終え、論文として発表した。そこで、これにつづいて西日本でもどのようなことがいえるか検証することとした。なお、江戸期の加賀藩主前田家による積極的な白山神勧請や、天海僧正による日吉堂の建立は知られたところであり、曹洞宗のなかに強い白山信仰がみられることもこれまでに指摘があるところだが、本研究ではこのような近世江戸期以降の事例は全て除外し、中世前期（鎌倉・南北朝）以前にしぼって検証することとした。

３．研究の方法

（1）神社本庁が平成初年に数年間かけて調査作製した『全国神社祭祀祭礼総合調査、平成「祭」データ』のなかから、それに記載された全国約 2000 社の白山神社と、やはり約 2000 社ある日吉神社（山王神社）の鎮座地地名（小字名、集落名）を全て抽出し、その地名を国土地理院発行の 20 万分の一地勢図上で拾った。同地勢図は全ての地名を網羅しているわけではもちろんなく、都市の市街地を中心に記載スペースがないなどの理由で省略されていることが多く、その不備を補うため、同院発行の 5 万分の一地形図、同 2 万 5 千分の一地形図上でさらに拾った。さらに明治期に一部地域（軍事拠点を中心とする）のみ作製された 2 万分の一地形図や、昭和戦前期の陸軍陸地測量部作製の地形図も、必要な範囲で購入活用したが、限られた地域にとどまっている。神社の位置を確認する作業は、同院発行の地勢図・地形図を直接用いるのではなく、フリーソフト・カシミール３D を用いて実施した。その結果、約 8 割の神社を、地図上で確認することができた。なお、神社本庁の調査データには、ほぼ 95 パーセントの神社に、鎮座地の緯度経度の位置情報が記載されており、それを活用して、カシミール３D 上に白山神社・日吉神社を置いた地図も、あわせて作成した。神社本庁への報告が正確になされている場合、ほぼ地勢図・地形図上の神社のマークと重なった。研究の過程で、神社本庁資料の位置情報をカシミール３D 上

に書き出すプログラムを開発できたため、これらの基礎作業は比較的短時間でできる状況にある。
（2）白山神社・日吉神社の鎮座地をマークした地図をもとに、そこに古代中世までの主要街道（駅路）や脇街道、さらに中世前期以前に成立した日吉社領や延暦寺領荘園を書き込んだ。『古代日本の交通路』（全 4 冊）などの交通史方面の諸研究をはじめ、遺跡調査報告書の成果を反映した文献（たとえば、古代交通研究会編『日本古代道路事典』など）も一通りあたった。そして、各神社の由緒来歴については、神社本庁『神社名鑑』をはじめ、各県神社庁が折々に編纂された各種県別『神社誌』や、ことには平凡社の地名辞書から多くの知見を得た。さらに中世前期までの諸史料にあたるようつとめ、白山神社や日吉神社の創祀がうかがわれる史料を検証することにつとめた。
（3）平成 29 年が白山開山 1300 年にあたり、そのことを奉祝する意味からも全国白山神社宮司大会がここ 10 年ほど毎年開かれており、申請者（平泉）も常に出席し、全国各地の白山神社についても見聞をひろめるよう努力している。さらに、申請者（平泉）は日吉大社（滋賀県大津市鎮座）から平成 30 年に出版予定の『日吉神社大年表』（仮称）の編集委員を引き受け、この作業を通じて中世の日吉信仰関連史料を確認することにもつとめている。

４．研究成果
（1）以上の作業を通して、いくつかもの見通しを得ることができた。なお、畿内と山陽道、そして山陰道でも京都から近い丹波国と丹後国は作業中で、論文公表は本年（平成 29 年）12 月を予定している。
　神社の創建といっても、白山神社や日吉神社を新たに創祀することはもちろんあるはずであるが、意外なことに、延喜式内社を名乗る白山神社また日吉神社がかなり存在していることは、すでに東日本で多くの例を検出できた。式内社である白山神社は、加賀一宮の白山比咩神社１社のみであることは周知のことであるから、このことは、式内社の衰微に乗じて、白山勢力や日吉神人が、活動の拠点として式内社に目を付けて、そこに新たに入り込んできたものに相違ない。そのような例を、山陰道・南海道・西海道でも検出できた。
　式内社が、主要街道の交差する交通の要衝や国府付近に多く存在することは既に知られたところであるから、そのような立地上の利点をも勘案して、白山勢力、日吉勢力が進出してくるのであろう。中世のある時期から「白山社」や「山王さん」として親しまれ、明治に入ってから、本来の式内社名に戻って称している神社を複数確認できた。
　山陰道では但馬国の佐支都比古阿流知命神社は通称が山王神社であり、高負神社は白山さんとして親しまれ、南海道では讃岐国の木田郡三木町字白山の白山神社は式内社和爾賀波神社の論社である。西海道では福岡県田川郡香春町鎮座の式内社辛國息長大姫大目命神社、忍骨神社、豊比咩神社は、現在は香春岳一ノ岳の麓に鎮座しているが、一、二、三ノ岳頂上には山王権現の社壇がかつてあった。
（2）山陰道・南海道・西海道のいずれにおいても、白山信仰・日吉信仰と修験また山岳信仰との間に密接な関係がある事例を数例知り得た。
　山陰道では但馬進美寺、伯耆大山と出雲の鰐淵寺、南海道では伊予の岩屋寺と土佐足摺岬である。これらの修験の霊場と日吉神社や白山信仰とが結び付いているのは大いに注目すべきである。『宇治拾遺物語』等にも、熊野三山、御嶽山はもとより白山・大山・鰐淵寺などを修行して回る山伏がいたことが明記されている。白山三馬場が比叡山延暦寺の末寺・別院となるのは平安末期だが、大山寺や鰐淵寺も延暦寺と結びついており、このように延暦寺の支配下にあったこと、修験の霊場であったこと、などを勘案すると、そういったなかで日吉信仰が大山寺などに入り込んだであろうことは容易に推測できる。大山や鰐淵寺の場合は、陸路はもちろんのこと、日本海の航路なども視野に入れて、大山、鰐淵寺に入り込み、またここから西海道に伝播していく可能性も考慮すべきであろう。
　西海道では福岡県直方市畑町鎮座の日吉神社は、山王権現と宇佐八幡、英彦山権現を一体とするという託宣によって勧請された。同県京都郡苅田町山口鎮座の白山多賀神社は、背後の等覚寺山が英彦山、求菩提山、蔵持山などとともに北九州を代表する修験の霊山である。その求菩提山に白山信仰がいつの間にか入り込んでいたことがうかがえる。前述の福岡県田川郡香春町に鎮座する式内社辛國息長大姫大目命神社、忍骨神社、豊比咩神社の創祀は奈良朝以前に遡り、一、二、三ノ岳頂上には山王権現の社壇がかつてあったことが知られ、山岳信仰と日吉信仰との間に関連が認められるのである。
（3）（2）で得られた知見などから、古代の山岳信仰が修験者の霊場また行場を生み、そこに山門勢力が入り込んできて、それが日吉信仰と結びつき、或は白山信仰が入り込んでくるという見通しが得られる。山陰道の但馬進美寺の背後の山頂に祀られた白山神社、南海道の足摺岬に祀られた白山権現などが、開創当初からのものというよりは、やや後になってから勧請されたとの所伝があることが注目される。西海道でも同様の指摘ができよう。
（4）以下、国別で気がついた点を記す。山陰道の但馬国には、いくつもの山門領また日吉社領が存在する。これまでの北陸道や東山道での検証から得られた結果では、このような比叡山の所領があったところには、現在で

も日吉神社が濃密に鎮座していることが多く、美濃国などでは荘園の中心に日吉神社が立荘の時から鎮座しており、あるいは複数の日吉社が鎮座していることが多かった。しかし、但馬国ではそのような事例がほとんどなく、歴史のなかでの神社の変転・衰退を感じさせる。なお、丹波国、丹後国そして畿内・山陽道は検証途中で、本年度中（平成 29 年度）に研究成果を発表する予定である。

（5）伊予国、つまり愛媛県には特異な事象が存在する。現在鎮座している白山神社は 4 社ほどであり、少ない。しかし、菊理媛や白山姫神など白山信仰と関係があることが確実な祭神を祀っている神社を加えると、実に百社をこえる神社が鎮座している。ほとんど全部が菊理姫（媛）を祀っており、なかには伊奘册尊また伊奘諾尊をあわせて祀っていることも多いのが目を引く。神社名は多様で、白山神社を名乗っているのは前述の如く 4 社のみだが、白山から遠く離れた伊予の地に、このように多くの白山信仰関連の神社があることはやはり注目されよう。その関連神社の全てを地形図上に置いてみたところ、伊予国全域にまたがっていることも特色といえよう。現在、そのきっかけとなったできごとなどは見つかっていないが、今後検討してみたい。このように、神社名ではなく、祭神名を検索した結果、予想外の結果が得られることはあり得ることで、神祇信仰や神社史研究の盲点となっている可能性もある。たとえば、石川県（加賀）は神明神社の数が、北陸の福井県や富山県と比べて非常に少ない、という見方がある。そして、そのことから、北陸に広く浸透し蟠踞していた白山信仰と衝突したのであり、歴史的にも、白山信仰関係の社寺が江戸期には伊勢御師の現地介入を拒んでいた、という説もある。確かに、神明神社だけの数をみると、福井県が約 100 社、富山県は 680 社を数えるのにくらべて、石川県ではわずかに 30 社足らずであるから、この見解は妥当なようにみえる。しかし、相殿神として天照大神を配祀している神社を加えると、この数は一気に増加して、福井県を上回るのである。つまり、明治期になって、神社合併策などによって神明神社が整理され、合併していく中から、たまたま神明神社の呼称が消えただけのことであって、神明神社の信仰、言い換えれば伊勢信仰が希薄であった、とは到底言えないのである。ともあれ、伊予国に白山信仰関連神社が多く鎮座することは、西海道への白山信仰の伝播を考える際にも留意しておく必要がある。

（6）豊前国（大分県）では、現、宇佐市正覚寺に鎮座する白山神社は、「宇佐託宣集」では行秀聖人が延喜 19 年（919）に加賀国白山権現の霊神を勧請し、旧正覚寺（現在は廃寺）の鎮守が白山神社という。正覚寺東方の御許山は宇佐神宮の神体山といい、平安期には正覚寺を座主坊とする一山組織が形成されており、修験の色濃いところであった。このことから、西海道にひろまった白山信仰は加賀からの伝播であったとも考えられよう。このことは、これまでの白山信仰研究史上に新たな話題を提供することとなる。一般に、全国にひろがった白山信仰については、白山三馬場、つまり加賀の白山比咩神社（加賀馬場）、越前の平泉寺白山神社（越前馬場）、美濃の長瀧白山神社（美濃馬場）のいずれからかの勧請と考え、一般的には、加賀以北の越中・越後・出羽・陸奥などへの伝播は加賀から、同じように越前馬場の勢力は主として西国へ、美濃の影響は東海地方から関東にかけてではないか、と推定されてきた。地理的な位置関係から主にこのように推測されてきたが、資史料によって確認されたことはほとんどない。勧請の経緯が明らかになった例としては、近世江戸期に、美濃馬場つまり長瀧白山神社や石徹白（かつては越前国に属していた、昭和 30 年頃より越境合併して岐阜県に編入された）の白山御師が、冬季の積雪時、東海地方に神札つまりお札を配りに回っている資史料がまとまって残っており、そのことから、東海地方の白山信仰は美濃側からの影響によることがわかっている。今回の正覚寺の例は、「宇佐託宣集」記載記事の信憑性については慎重に検討しなければならないものの、西海道にまで加賀の白山信仰の影響が及んでいた可能性を示唆しており、従来の仮説に再検討を求めるものとなる。

（7）福岡県は、筑前、筑後そして豊前国に属する数郡からなる。県全体で日吉神社は現在 109 社ほど、白山神社も 21 社が鎮座している。複数の西海道の国からなる県とはいえ、日吉神社の数は近江（滋賀県）についで越後（新潟県）とならんで第 2 位で、その多さは際だっている。これほど多くの日吉神社が存在すること、白山神社もそれなりの数が北陸から遠く離れたこの地に鎮座していることは、注目される。比叡山の所領・瀬高荘があった（八女市の南方、瀬高町周辺）というだけでは説明できず、現時点では解明できていないものの、今後の課題としたい。東山道で多く見られた「白山堂」「日吉堂」の地名や、寺院内に現に白山堂があるような事例も見当たらなかった。

（8）今後の課題としては、特定の時期にかなりまとまって白山神社や日吉神社が勧請された事例があるため、その時期に白山勢力、日吉勢力にどのような動きがあったかを確認する作業が残されている。西海道への白山信仰・日吉信仰の浸透伝播が、山陰道から海沿いに九州北部へ、山陽道を経て西海道に、南海道を通して西海道の豊後あたりへ、と種々考えられるものの、確証が得られたわけでは必ずしもない。今後さらに追求していきたい。地勢図・地形図上に古代の官道また中世の主要街道を書き込んだが、そのルート上また官道からの至近距離に日吉神社が鎮座していることは西日本でも多くの例証を得た。海上交通共々、伝播の道については依然

課題が残されている。
（9）白山信仰について研究史を概観し、新たに数点の知見を得た。『泰澄和尚伝記』『白山之記』の記述を分析し、加賀馬場（白山比咩神社）は、白山に鎮まる神々を麓で祀る神社であること、それに対して、加賀中宮は、白山山頂と白山本宮（白山比咩神社）の中間に位置するため中宮と称した、というような意味合いは全くなく、神々が住む聖なる世界と、庶民が住む俗界の境に位置する重要な場所に建っていることを改めて確認し、越前馬場（平泉寺白山神社）の性格は、この加賀中宮に近似するものであることを「中居」の語などからも明らかにした。三馬場のかかる大きな相違点を指摘した研究は、これまでなかったと思う。そして、白山開山の泰澄が、初めて平泉寺の地（当時はもちろんこのような地名はなかったが）を訪れた際に集落がなかったことはほぼ確かで、三馬場とも「自然発生的に成立」したとみる通説は成り立たないこと、ひいては三馬場が自然発生的に成立したことを主な論拠として、本来、白山信仰に本家も分家もなかったとする説に対して全面的に疑義を呈した。後年のことではあるが、白山曼荼羅、白山狛犬、能面や神事能など白山麓で競うように藝術作品が生み出されていったことからも、白山三馬場相互の交流にも目を向けるべきであることを論証した。今後、白山曼荼羅の研究が進めば、自ずと三馬場相互に影響し合い、意識しあった過程が明らかになってくるはず、と結論づけた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5　件）
① 平泉 隆房　中世前期における白山信仰日吉信仰全国伝播についての一考察（二）―東山道を中心として―　（金沢工業大学日本学研究所）『日本学研究』17　2014年　pp1～66）

② 平泉 隆房　中世前期における白山信仰日吉信仰全国伝播についての一考察（三）―東海道・西海道を中心として―　（金沢工業大学日本学研究所）『日本学研究』18　2015年　pp1～77）

③ 平泉 隆房　中世前期における白山信仰日吉信仰全国伝播についての一考察（四）―山陰道・南海道を中心として―　（金沢工業大学日本学研究所）『日本学研究』19　2016年　pp1～45

④ 平泉 隆房　越前馬場の信仰　（『悠久』148号　2017年　pp62～71）

⑤ 平泉 隆房　白山信仰をめぐる諸問題の概要
（『藝林』66巻1号　2017年　pp31～54）

〔学会発表〕（計　1　件）
① 平泉 隆房　白山信仰をめぐる諸問題の概要　藝林会学術大会　福井市立郷土歴史博物館　2016年

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
平泉隆房（　HIRAIZUMI　Takafusa　）
金沢工業大学・基礎教育部・教授
研究者番号：20148357

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）